

Q&A

このコーナーでは、疾病や繁殖への質問、往診時には聞けなかったことや今更聞けないことなど、みなさんの疑問にNOSA I 職員がお答えます。同封のハガキやFAX等でお気軽にお寄せください。

今回は
浜中町姉別 41歳の女性より

『BVDについての記事をお願いします。』

この問いに根室北部事業センター第3家畜診療課の中田悟史獣医師が答えます！

BVD-MDとは？

正式名称は牛ウイルス性下痢・粘膜病で、名前が示す通りウイルス感染症です。この病気はBVDウイルスが原因で、ウイルスの遺伝子型により1型と2型に分類されています。本症は届出伝染病に指定されており、根室地方の発生状況は表のとおりとなっています。

	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年
バルク乳検査による摘発	2戸2頭	0	4戸8頭	3戸14頭	0
個体の検査による摘発	3戸9頭	3戸4頭	3戸3頭	1戸2頭	2戸2頭

#根室家畜保健衛生所の厚意によりデータ提供を頂きました。

症状は？

一般的に成牛が感染しても一過性の発熱や呼吸器症状、下痢などが認められ、その多くは回復します。しかし感染しても症状を示さない場合も多数あります（不顕性感染牛）。

本症に対する免疫のない妊娠牛が感染した場合、胎盤を介し子牛にも感染します。本症に対する免疫のない母牛がBVDウイルスに感染した時期により、死産や奇形、さらには生涯BVDウイルスを排出し続ける持続感染牛が生まれてきます。

粘膜病は持続感染牛が発症する病気で、発熱、水様性下痢、脱水、全身の粘膜の充出血やびらん・潰瘍などが認められ、ほとんどは予後不良となります。



写真左より
・感染牛
・粘膜病
・下痢

<粘膜病の写真提供：根室西部事業センター佐藤獣医師>

感染予防対策は？

感染症の予防対策として、感受性動物への対策、感染源への対策、感染経路の遮断の実施が基本となります。

- ①感受性動物への対策として牛群単位のワクチネーションが推奨されています。接種するワクチンの種類やプログラムについては最寄りのセンター・診療所にお問い合わせ下さい。
- ②感染源への対策として、持続感染牛の早期摘発と淘汰が推奨されています。持続感染牛の摘発法として、バルク乳や個体の血液からBVDウイルスやその遺伝子を検出する方法があります。こちらについても最寄りのセンター・診療所にお問い合わせ下さい。
- ③本症は感染牛との直接・間接的な接触、あるいは空気伝播により感染することが確認されています。空気伝播による感染経路の遮断は難しいことから、感染牛を導入しないことが重要となります。

本稿は、NOSA I 道東のホームページ「技術情報」→「ワンポイントアドバイス」→「牛ウイルス性下痢・粘膜病（BVD-MD）とは」を参考に新しい情報を加えました。